

輝く

豊中市では、全国で活躍する高校生のスポーツチームがたくさんあります。彼ら彼女たちの頑張りは、見る人に感動を与えるだけでなく、人としての成長にもつながっています。

(長興寺南)
履正社高等学校
女子硬式野球部

プレーを通して 女子野球の魅力を伝える



平成29年(2017年)9月に香港で開催された「第1回BFA女子野球アジアカップ」では、高校生で編成された侍ジャパン女子代表が全勝優勝。履正社高等学校女子硬式野球部からは、4人が代表に選ばれています。「競技人口が少ない女子野球の選手たちは、自分たちの頑張りでの競技をメジャーにしたいという夢があります」と話すのは橋田恵監督。アジアカップでは日本代表史上初の女性監督としてチームを率いました。創部4年目の全国大会優勝を達成した背景には、部員たちによるひとつの選択がありました。「中学までは男子と一緒に練習してきた部員がほとんどで、好きな野球を女子だけでやれることがうれしくて仕方がない。そこに甘さが見え隠れしていたので、「試合に勝ちたいのか」「楽しく野球をやりたいのか」自分たちで決めるように、前者を選んだことでチームの方向性が決まりました」。専門家によるメンタル講座も部員の内面に変化をもたらしています。吉井温彦さんは「感情を態度に出して周りに悪影響を与えないよう意識しています」。香川怜奈さんは「チームのために、お互いに言いたいことを言える雰囲気になりました。北山未来さんは「親にも『ありがとう』と感謝を言葉にしています」などと話します。

(長興寺南)
履正社高等学校
硬式野球部



春の選抜高校野球大会準優勝など、大阪を代表する強豪校の一角をなす履正社高等学校硬式野球部。同校を率いて30年の岡田龍生監督は、甲子園をめざし、野球のことだけを考えて入部してくる部員たちに「野球部員である前に履正社高等学校の生徒だということを忘れるな」と教えます。そして卒業後にプロや社会人で野球を続けられるのは、チームのなかで多くて2割という現実を示して、自分の将来を考えるきっかけを与えます。「野球がうまくなりたいたい一心の彼らには、野球を通して自分の弱点に気づき、克服するかを自ら考えるよう促します。その力がつければ、社会に出て壁にぶつかったときに乗り越えることができるし、結果的に野球の上達にもつながります」と話します。

そのために岡田監督は、ミーティングを大切に、部員との個別面談ではじっくりと話し合う時間をもちます。「彼らが大人になったときに、いつか思い出してくれたらいい。そんな気持ちで話をしています」。

社会で通用する「人」を育てる

部員との個別面談ではじっくりと話し合う時間をもちます。「彼らが大人になったときに、いつか思い出してくれたらいい。そんな気持ちで話をしています」。

チーム力で「日本一」をめざす

(利倉東)
大商学園高等学校
女子テニス部

テニスを通して人として成長

毎年全国大会に出場し、団体戦でベスト8入りの実績もある大商学園高等学校女子テニス部。笹井伸郎監督は「個人種目のテニスでは、うまくなるために専属コーチに付くことが多いですが、あくまでも部活動としてテニスを通して人格形成が最終目標。週に1回外部のコーチからうける指導にも、指摘された課題に対して自分で考え、部員同士がアドバイスしながら切磋琢磨するチームをめざしています」。部員との交換ノートを通じて、一人ひとりの胸のうちを知り、個別に話を聞いたり、ミーティングで話し合うことにも時間を費やします。団体戦を重視するのにも心を育てることにつながるという考えから、



全国大会常連で、決勝進出経験もある大商学園高等学校女子サッカー部。「日本二を期待されるなか、平成28年度全国高等学校総合体育大会(インターハイ)は、よもやの予選敗退。勝ち続けることの厳しさを肌で感じた部員たちは生活面から日本一にふさわしいチームになる」と努力しました。部員一人ひとりに声をかける先輩の姿が印象に残っています。「お互いの良いところも良くないところも言葉に出し合うことで絆が強くなりました」と振り返るのは、林かおるさんと林みのりさん。努力が実り、同年度の全日本高等学校女子サッカー選手権大会では準優勝に輝きました。

(利倉東)
大商学園高等学校
女子サッカー部

「挨拶、勉強、感謝する気持ちなど、できていないことがあれば、個人の責任だけではなく、チームとしての声かけやサポートで、より良くしようという視点を持っています」と岡久梨監督。

「技術に勝るチーム力」というスピリットのもと、学校生活全般にわたって高め合う精神は、先輩から後輩へと受け継がれていきます。